

## 対人関係の親密化過程に関する研究 —関係性の初期差異化現象に関する検討—

山 中 一 英

### I. 問題と目的

従来、社会心理学では、個人間の表面的な接触によって形成される対人魅力の規定因についての研究には大きな関心が払われてきたが、親密な関係、さらにつながった関係へと進展するプロセスについての研究は比較的軽視されてきた (Burgess & Huston, 1979 ; Huston & Levinger, 1978)。現実の対人関係がどのように親密なものへと発展していくのかといったプロセスに関するデータはほとんど存在していないといって過言ではない。

対人関係の親密化過程に関する最も系統的な理論で、しかも後の研究を非常に刺激した理論が、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論である。この理論の主な仮説は、対人的交換は内容の領域に関する「広さ」(breadth) と、親密性のレベルに関する「深さ」(depth) という2次元でなされ、対人関係が進展するにつれ、狭い領域での表面的な相互作用から広い領域での親密な相互作用へと段階的にかつ系統的に進行していくというものである。要するに、親密な関係と親密でない関係とは時間経過とともに段階的に分化していくというように、対人関係の親密化過程を段階的プロセスとしてとらえるものであった。

ところが、近年、Berg (1984), Hays (1984, 1985), 中村 (1989) などによって、対人関係の親密化過程はそのような段階的プロセスではないと主張する研究がなされた。それは、ある対人関係の親密化可能性はその形成期において決まる、すなわち、ある関係の出会いからの初期の対人的相互作用の様態が、後続の相互作用の型を決定し、ひいては関係そのものの発展または崩壊の方向を運命づけてしまうというものであった。彼らは、このような現象を、関係性の初期差異化現象 (early differentiation of relatedness) と呼んでいる。

しかしながら、この関係性の初期差異化現象を示した研究は、関係の“初期”として測定のなされた時期が、授業開始から2週間の時点 (Berg, 1984), 新学期開始から3週間経過した時点 (Hays, 1984, 1985), 入学から約1カ月の時点 (中村, 1989) であり、その測定時点ですべて、将来親密になる関係とそうならない関係との間に差異が生じていることは示されたが、それまでの数週間でいつ差異が生じ、その差異が安定したものとなる

かは依然として明らかではない。

したがって、本研究では、先行研究では検討されなかった、出会いから極めて短い期間に焦点を当て、大学新入学生を対象に、対人的相互作用のあり方に関する継時的数据を収集する。そして、出会いから極めて短い時点ですべて、将来の親密な関係と表面的な関係とを分化する差異が生じているとするならば、先行研究よりもさらに初期に、関係性の初期差異化現象 (early differentiation) が生起していることを確認することになる。また、極めて初期の時点では、関係は分化されず、その後対人的相互作用を繰り返しながら関係が段階的に分化していくのであれば、社会的浸透理論 (gradual differentiation) を支持することになる。この点を検討することが本研究の第1の目的である。

また、対人関係の親密化過程に影響を及ぼすパーソナリティ要因を検討することが第2の目的である。

さらに、二者間で成立、発展していく対人関係を理解し予測する上で、相手のパーソナリティをいかに認知するかは、極めて重要な問題である。にもかかわらず、本邦においてこれまでに、対人関係の親密化過程における対人認知を扱い、継時に資料を収集した研究は、大橋ら (1978, 1982), 今川 (1984) の研究以外ほとんど存在していない。そこで、本研究の主目的からはいさか離れるが、対人関係の親密化過程におけるパーソナリティ認知の変容過程等を検討、吟味していくことを第3の目的とする。

### II. 方法

被調査者：本研究では、4回の調査において、想起した対象人物として記入させたイニシャルが4回とも全く同一であった被調査者のみを有効被調査者として分析対象とした。有効被調査者は、国立大学1年生94名（女性51名、男性43名）。調査実施時期：1回目を入学式の1週間後、2回目を入学式の2週間後、3回目を入学式の4週間後、4回目を入学式の約2カ月半後に実施。手続き及び質問紙の構成：“大学入学前はお互いに見ず知らずで、入学後知り合い、時間が経つにつれて、良い友人になりそうだと思う同性の人物を頭に思い浮かべてください”という教示のもとに（1回目のみ）、対象人物を想起させ、イニシャルを書かせた上で、以下に示す尺度

## 対人関係の親密化過程に関する研究

項目に回答させた。(1) 友人関係に関する行動チェックリスト：112項目からなり、社会的浸透理論の広さと深さの次元に沿うよう、項目を4(広さの次元:Companionship, Communication, Consideration, Affection)×4(深さの次元:親密性レベル1～4)の計16のカテゴリーに分類。(2) 対人認知尺度：20項目。(3) 被調査者の対象人物との関係に関する項目：好意度、関係関与度、関係の親しさの地位、性格の類似性、態度の類似性など。(4) パーソナリティ変数：社会的スキル、孤独感、認知的熟慮性一衝動性、対人判断の慎重さ、信頼感。

### III. 結果と考察

本研究では、二者関係の親密さの基準として、好意度、関係関与度、関係の親しさの地位の3項目の平均評定値をもって、関係親密度得点とした。1回目の関係親密度得点によって親密関係群、表面的関係群を設定し、1回目の関係(2)×性(2)の分散分析を、4回目における関係親密度得点について行った。その結果、出会って1週間の時点での関係の分化が約2カ月半後まで持続していることが示された。ただし、ここで注目すべき性差が見いだされ、女性の場合1回目の時点ですでに比較的安定して将来の関係の分化を表していたのに対し、男性の場合は1回目の時点での分化はまだ不安定な分化であった。そこで、2回目の関係親密度を基準として同様の分析を行った。その結果、出会って2週間後の時点でなされた関係の分化は約2カ月半後まで全く安定していることが示された。1回目の時点での分化は不安定なものであった男性においても極めて安定していることが示された。また、行動カテゴリーに関して、4回目における各行動カテゴリーの出現頻度を従属変数として、1回目の関係(2)×性(2)の分散分析を行った。その結果、4つの行動カテゴリーが、出会って1週間の時点ですでに、将来親密になる関係とそうならない関係の分化を表しているカテゴリーであることが示された。しかし、2回目の関係親密度で群を設定した場合には、12のカテゴリーにおいて、出会って2週間後の分化が約2カ月半後まで持続することが示された。以上の結果より、出会って2週間ですでに将来の関係に関する安定した分化がなされており、関係が親密になるかならないかは出会って2週間で決まるということが明らかとなった。また、2回目で関係を親密だと

評定したものと表面的だと評定したものとの、2週間ににおける相互作用の違いを検討したところ、2回目で関係を親密だと評定したものはほとんどすべての行動をより多く行っていた。要するに、出会って2週間の間に、あらゆる領域のさまざまな親密性レベルの行動を対象人物を行い、こうした相互作用を通して対象人物との関係に関する決定を下したのであろうと考えられる。

次に、対人関係の親密化過程に及ぼすパーソナリティ要因の影響については、人間は基本的に正直で信用できるものであるという信頼感、及び社会的スキルの下位尺度である関係開始スキル、自己主張スキルが影響を及ぼしている可能性が示唆された。すなわち、信頼感の高いもの、関係開始スキルが自分にはないと認知しているもの、自己主張スキルが自分にはないと認知しているものは、出会って1週間後の時点から比較的将来の関係が分化していることが示された。

さらに、対人関係の親密化過程におけるパーソナリティ認知に関しては、出会った初期の時点から他者のパーソナリティを安定的に認知していることが示された。また、パーソナリティ認知と関係の親密さとの関連については、女性の場合、相手のパーソナリティの社会的望ましさに関する認知は、関係の親密さの認知にとって重要ではないという注目すべき性差が見いだされた。

### IV. 今後の課題

本研究では明らかにされず、早急に検討すべき課題がいくつか考えられる。まず第一に、本研究では最後の調査を行ったのが出会いから約2カ月半後の時点であった。1年、2年先の関係の性質をも出会って2週間という期間で予測できるのであろうか。もっと長期的に関係を追跡することが必要であると思われる。第二に、本研究で得られた結果は、本研究の対象である大学生にどの程度依存した結果であるのかといった疑問がある。一般的な成人の場合、はたして2週間で将来の関係の性質に関する決定がなされるであろうか。今後、大学生以外の集団に対して検討していく必要があると思われる。第三に、本研究はいわば記述的資料を収集した研究であったが、どうして関係性の初期差異化現象が生起するのかといったメカニズムを解明するための研究が必要であると考えられる。